

菊池市佐野地区での過疎集落支援活動

次のステップへ

菊池市佐野地区での活動は、平成28年の熊本地震までさかのぼります。当初は佐野地区のお隣、鍋倉地区で活動を開始しました。農地の被害だけではなく、みなし仮設への引っ越しなどで農地から離れて農作業に従事する農家さんたちのお手伝いをする。そこからスタートし、活動はD-SEVENやボランティア実践の履修学生たちが継続して行っています。あの地震から5年、今年度の活動もコロナに見舞われ自由度を欠きましたが、これまでとは異なる動きがありましたよ。



出来上がった蜂箱8つは、栗畑の中へ設置。1つは入りかけたけど、残念ながら逃げてしまったらしい…。来年こそは。

ミツバチを飼ってみたい! ということで、蜂箱づくり。日本蜜蜂を飼育している方々へ学生が教えてもらいに行き、作り方を佐野の方へ。



5月・6月は苗床洗浄。井手で洗うのですが、これがかかなり冷たい。合間でカエルを見つけたり、田んぼの生き物にワーワー言ってみたり。「なんでそれが珍しいの?」と地区の方が毎回聞いてます。

学生の声

佐野の活動に参加したきっかけは、幼いときに農業を経験していたので興味があったのと、人の役に立ちたいと思ったからです。実際に活動に参加してみて、「農業の大切さ」を学びました。生きていくうえで欠かせない「食」を生み出している農家の方々に感謝の気持ちをこれまで以上に持つようになりました。自然豊かで、空気がおいしいと感じる佐野地区で、幅広い世代の方々と和気あいあいとした雰囲気の中、作業することはとても楽しいです。

農業は欠かすことができないにも関わらず、どんどん衰退していています。理由の一つとして、多くの人が農業を「きつそう・大変そう」と考えているからだと思います。D-SEVENの活動を通して、「農業って楽しい!魅力がある!」と感じる人を増やしていけたらいいなと考えているので、興味がある人はまずは一歩踏み出して、活動に参加してみしてほしいです。きっと新しい学びがあると思います。

(法学部2年 山下華奈)

学生の声

きっかけは友人の勧めがあったため佐野の活動に参加しました。佐野の印象は、景色が良く、地域の方も優しいので、雰囲気良く活動をする事ができる素敵な場所です。コロナ禍で人との交流が減る中で、学生や地域の方々と関わられる貴重な機会だと思います。佐野の活動を通して、農作業の大変さを知るだけでなく、活動によっては地域のお母様方や菊池の子供たちなどと触れ合う機会もあり、人との交流の大切さを実感しました。活動で難しかったと感じたのは体を動かす作業が多いことで、農作業の大変さを再確認しました。ですがその大変さもコロナ禍での運動不足解消にはとても良かったです。人も場所も素敵なので、一度行ってみることをお勧めします!

(工学部3年 東 颯太)



稲刈りが終わったら、水田ごぼうの作付けへ。菊池市の特産物の1つです。田んぼを利用したごぼうは、柔らかくて美味しいらしい。この広い畑、例年はご夫婦2人でビニール張りの作業だそうです。

少し早めに作付けしたごぼうは、大きさがこんなに違う。
小さな草は、手作業で抜くしかない。腰が痛い作業です。



学生の声

過疎化・高齢化が進む佐野地区の農家さんの力になりたいと思ったこと、幅広い年齢層の方との繋がりがほしいと思ったことが参加のきっかけです。ある道を抜けると、田んぼが一面に広がり、とても美しい風景が見られます。そこが佐野地区で、自然のパワーをもらえる場所です。農家の皆さんはとても優しく、いつも学生に分かりやすいように作業内容を説明してくださいます。時には世間話をして楽しい雰囲気です。佐野地区は、自然豊かで食べ物美味しい、素敵な場所ですが、中々若い世代が集まりません。私達が肌で感じた魅力を同世代の人に伝えたいと思っても、中々広まらないのが現状で、地域活動の難しさを覚えました。この現状を打破するため、D-SEVENが佐野地区の魅力を世に伝えられる存在になれるよう、今後も精一杯頑張ります。

(法学部2年 井上陽菜)

学生の声

佐野の活動に参加したきっかけは、D-sevenの先輩から楽しそうな話を聞いたことです。もともと田舎育ちなので、空気がおいしくて自然が豊かな場所で活動できることに大変魅力を感じました。実際に行ってみて、地域の方は暖かい市内にいたら絶対にできない経験であるため非日常を体験することが出来てとても楽しかったです。また、若者が地域の方と一緒に活動すると活気も出るし、貴重なお話も聞くことができる点も佐野での活動の魅力だと考えます。地域活動の難しさを感じることは、人が少ないということです。特にその地域に若い人が少ないと感じ、継承するということが気がかりな点として残りました。

(教育学部2年 永松 朋実)



イノシシ除けの電柵張り作業。こんな作業、この活動をしてないと絶対覚えられない……。その言葉が印象的でした。イノシシは鼻が濡れているから感電する。1回感電すると、お尻から畑に入ってくるらしい!敵もなかなかです。



今年は初めて「餅つき」を行いました。「杵と臼で餅つきしてみたいなー」という学生の言葉から、「やってみる？」という具合に。12月には地区総出の餅つき大会に。各家庭でお持ちの注文も取り、販売をするまでに。「昔はこうやって餅つきしたんだよね」「やっぱり自分でついたほうが美味しいよね」「こんなことでもないと家から出てこない」そんな言葉を聞きながら、日頃の活動では会わなかった地区の方まで顔を合わせワイワイした時間となりました。活動を始めて5年。単なる農業のお手伝いではなく、学生たちとの交流を通して地域のみんが何か楽しいことをしたいという気持ちに変わってきている。そんな空気を感じることができるようになりました。



地域で学ぶということ

学際科目「魅力開発プロジェクト」で牛深へ

地（知）の拠点整備事業（通称COC事業）やCOC+事業で整備された教養のPBL科目は、今も多くの学生が履修しています。この2年、新型コロナウイルス感染症の影響でフィールドワークを主軸とする講義も影響を受けました。それでも今年度はどうにか感染症のピークの合間を縫って、天草市牛深での講義を実施できました。

大学生20人が5つのグループに分かれて「学びの拠点」「空き家対策」「仕事の創出」「高齢者の楽しみ」「情報発信」のテーマで地域調査&成果報告会。合宿までに基礎調査は行ってきましたが、実際に地域の方にお話を伺ったり、町を歩くだけでも考えは変わるようです。成果報告会には、地域の方や行政職員もご参加いただき、採点も出席者全員で行いました。



牛深の町を歩きながら、それぞれのテーマに沿ったヒアリングを行いました。夜は牛深ので合宿。



発表前のプレゼン作成。プレゼン時間は15分。発表の仕方など、それぞれで工夫しました。

おばあちゃん食堂

目的：図書館を維持するための資金として運営
(1食500円での提供)

地域のご飯作りが趣味のおばあちゃんが
ご飯を作る

—土日の営業

使う食材は、農家やスーパーの廃棄になったもの
(朝日DASHの0円食堂をイメージ)



空き家対策を提案したチームからは、色々な使い方の提案がありました。

地域の方々から、
家に眠っている本やマンガを集める
—自らの手で空き家を改装する

—地域、近隣の方々を巻き込み
一緒にDIYをする



「アイデアは面白いけど対策にはならないよね。」というコメントや、「図書館で飲食なんて!」というもので。地域の皆さんからのコメントへどうこたえるのか、それも経験になったかと思います。

熊本の地方と向き合うことで、自分の出身地を今一度考えてみてほしい。なかなかフィールドに出られない状況が続いていますが、地域に出ること人と関わることで得られる学びはあるはず。

2年前にこの講義に参加した学生が、今回は先輩として社会調査や成果報告会を取り仕切ってくれました。



ボランティア活動を考えている後輩へ

ボランティア活動に参加した先輩たちから

2021年度キャリア科目53「ボランティア実践」を受講した学生の声です。コロナだからこそその課題もある一方で、活動するメンバーからの刺激を受けた学生も。あなたの活動の何かヒントがありますように。

●コロナ禍の活動で難しいのはやはり相手の表情を読み取ることである。マスクをしているため反応が見えにくかった。そんな中でコミュニケーションをとるために相手のことをよく観察するようになったのは収穫である。

●ボランティアは何かしら気づきを、新たな視点を与えてくれるものであるからいつも同じ作業になるバイトからちよつと離れて出かけてみるといいのではないかなと後輩にアドバイスしたい。

●今後ボランティア活動に参加する人には、まずは自分で積極的に行動し、何か困ったことがある際には迷わず誰かに相談すること、そして情報を交換できる友達を作ることを実践してほしいと思う。

●報告会を聞いて、それぞれの場所でそれぞれの活動を行っており、活動内容や学んだこと、得たものなど異なっていて、ある一つのボランティアを続けることも

良いことですがたくさんのボランティアをすることで、新たな発見や違うものの考え方を持つことができるようになるのではと思うようになりました。

●ボランティア交流会に参加して、何か1つのボランティアを継続するのもいいのではないかと思った。そのボランティアが行われる場所で信頼関係を築くことができ、仕事に慣れることでできることも増えてくることを知れたからだ。

●ボランティア活動交流会では、たくさんの履修者のそれぞれの活動を知ることができた。私と同じ熊本YMCAでリーダーとして活動している人が数名いたが、それぞれボランティア活動を行おうと思った動機やYMCAをボランティアとして選んだ理由が違って面白かった。

●今後ボランティアに参加する後輩には、「とにかくやってみる」という事を大事にしてほしいと思う。ボランティアに参加

するというと、つい身構えてしまいがちだが、ボランティアに参加するという感じではなく、今は、参加者と同じ目線で、自分も新しい学びを得られる、成長できる場という風に感じるようになった。ボランティアは、参加する方も含め、みんなが笑顔になれる素敵な活動だと思う。

●ボランティア活動で印象的だったことは、人との接し方である。年が離れた子どもたちや高齢者と関わる上で意識していることについて意見を聞いた時、新しい発見があって新鮮だった。

●私が今後ボランティア活動を通けるにあたって必要なことは、「人との繋がり」をもっと大切にすることである。これまでもボランティア活動がきっかけで仲良くなった友だちやボランティア活動を通して交流することができた地域の方々がいる。このような「人との繋がり」を今後、さらに広げていけたらいいと思う。

●これからボランティア活動に参加する後輩には、「ボランティアが楽しい!」と思えるような環境をつくるのが大切」と伝えたい。自分から話しかけてみたり、自然と笑顔があふれる場になったり。ボランティア活動を通して、たくさんの人と交流してみたい。

●水泳などの特技を生かしている方もいれば、将来を見据えた活動をしている人

もいた。ボランティア論にもあったように決して、自分が苦になるほどまでやるものでないしそれぞれの考え方があっていいのだと納得した。

●これからも活動を続けて、多様な価値観を持つたくさんの方々と交流をしていくことで、コミュニケーションの取り方が分かってくるのではないかと思った。

●活動をしていく中でボランティアには信頼関係がすごく大切だと感じた。ボランティアで会う人はその日限りの出会いかもしれない。1日で信頼関係を築くのはすごく難しい。それでも工夫すれば信頼関係を築くことができると考える。仕事を任せてもらうのに必要なのは信頼関係ではないだろうか。

●ボランティア活動で課題があると感じたことは、やはりコロナウイルスによってボランティア活動が少なかったことである。しかし自分から進んで情報を集めれば家でできる活動もあつたりしたのでボランティア活動についてのアンテナを高く張っておく必要があると感じた。

●1人1人が自分自身の課題と向き合い、自分を試しながら成長に繋げていくために、ボランティアは最高の機会だと考える。私がボランティア活動を始めたきっかけは、自分の暇な時間で誰かの役に立てるならと思ったことがきっかけだが、今もその考えの根本は変わらない。後輩

たちには、これからもボランティアという全然知らない環境に自ら飛び込み、自分と好きなだけ向き合ってほしい。そして何より新しい出会いを心から楽しんでほしいと強く願っている。

●異なる学部の人々がほとんどだったので、それぞれが学んでいることや得意なことを活動に活かしたら素敵だと思いました。ボランティアでは経歴も考え方も全然違う人々と出会えると思うので、自分の個性や長所・短所を見つけるいい機会になると思います。これからもいろんな活動に参加していきたいです。

●私自身がボランティア活動を始めたきっかけが昨年に見つけて何となく始めようと思ったことがきっかけだった。自分の中では他の人たちは何かの強い信念を持っている人や確固たる理由がある人たちばかりなのかなと思っていましたが、交流会で話を聞いているときに活動のきっかけが、自分の好きな分野だったからなど気軽な理由が多く驚いた。気軽に始めて良いものだと思えばボランティアはもっと活発になるのではと思った。

●報告会に参加して一番思ったのは皆様々な活動に参加してうらやましいなと思ったことです。災害復興やグローバルなこと、野外活動など、皆の発表を聞いているととても楽しそうだなと思いました。ぜひこれから活動をしようと思っている後輩には様々なボランティアに積

極的に参加して、喜びをたくさん見つけてほしいなと思いました。

●ボランティアをまず見つけること、そして参加した上で、自分にあったものを見つけることが難しいと感じた。新型コロナウイルスのためにボランティアの新規募集を中止している団体が多く、見つけることも困難であった。その上、参加してみたが、自分が考えていた活動と異なることもある。しかし、参加しなければ何も始まらない。思っていた活動と違っていても、自分の新たな可能性が見つかることがある。

●私は今まで自分からボランティアの情報を調べることはなく、送られてきた情報の中から自分の都合のいい日にちに行われるボランティア活動を選んで参加しているといった感じだった。そんな状態の時にこのボランティア交流会に参加して周りの方々の状態を知ることが出来たためそれからは私も自分の興味がある・無い、参加してみたい・してみたくないといった観点で活動に参加するようになり、ボランティア活動の時間がとても有意義で楽しい時間になったなという感じに変わった。



2021年12月4日 菊池市佐野にて

「地方創生カフェ通信 Vol.2」

2022年3月印刷

熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

熊本大学熊本創生推進機構地域連携部門

電話：096-342-3464

メール：coc-plus@jimu.kumamoto-u.ac.jp



Twitter



Instagram



Facebook